

座談会

強・用・美の進化

2023年度は「強・用・美の進化」を年間テーマに、夏号では「強」、秋号では「用」、冬号では「美」についてそれぞれ3組の方にその捉え方や考え方を書いていただきました。最終回である今号では、執筆いただいた中から4名の方にお集まりいただき、担当されたテーマを越えて「強・用・美」についてディスカッションしていただきました。

- | | | |
|-----|-----------------------------------|--|
| 参加者 | 古澤大輔
松岡 聡
田村裕希
小山 光 | リライト_D/日本大学 准教授
一級建築士事務所 松岡聡田村裕希/近畿大学 教授
一級建築士事務所 松岡聡田村裕希/東京工芸大学 准教授
キー・オペレーション |
| 聞き手 | 関本竜太
佐久間達也
『Bulletin』WGメンバー | 『Bulletin』WG
『Bulletin』編集長 |



左から、田村裕希氏、松岡聡氏、関本竜太氏、佐久間達也編集長、小山光氏、古澤大輔氏、田口知子広報委員長

「本能的な美」と「考える美」

関本●本日は、夏号で「強」について書いてくださった古澤大輔さん、秋号で「用」について書いてくださった松岡聡さんと田村裕希さん、冬号で「美」について書いてくださった小山光さんにお集まりいただきました。まずは簡単に自己紹介をお願いしますでしょうか。

小山●設計事務所キー・オペレーションの小山と申します。「美」について書かせていただきました。普段は商業建築の仕事が多いのですが、最近は商業以外の仕事もしています。

古澤●「強」を担当しました古澤です。リライト_Dという設計事務所をやっています、日本大学の理工学部で建築を教えています。僕は「両義的な躯体の姿」というタイトルで文章を書かせてもらいました。建築に限らず事物の両義性について興味があるので、両義的な状態とはどういうことなのか、あるいは両義的な状態が示す可能性とはどういうものなのか考えながら設計しています。

松岡●一級建築士事務所松岡聡田村裕希を主宰しています松岡です。「用」を担当しました。普通、設計するときには有用性は考えていることなので書きやすいかと思ったのですが、ひと通り網羅的にも、自分たちの作品で特別考えていることも言いたいと思ったので、書きやすそうで難しかったというのが実感です。

田村●田村です。皆さんの文章を拝見して、「美」について書くのが一番難しそうだなと思いました。ただ、皆さん書いてるように、「強・用・美」という3つがどれも建築の中で絡

み合っているということには同意だなと思いました。

関本●皆さん難解なお題に対して本当にさまざまな視点で執筆してくださいました。他の方の文章を読まれて、どんな感想を持ちましたか。

小山●やはり「用」が意匠設計上王道の部分で、施主に対しても、どんな建物を建てるのか計画を最初に説明するのがメインストリームだという気がしました。「強」は、直接的な「強」ではなく、解釈も含めた「強」に興味深く読みました。例えば、伊藤暁さん(夏号で「強」について執筆)は、構造フレームの中でどのようなフレキシビリティを持てるかを、軸組模型を示しながら書かれています。古澤さんも、事例として出されている自邸はRC造ですが軸組ですよ。材料は違いますが、どちらも軸組で語っているのが面白いと思いました。

松岡さんと田村さんは用途の変更の可能性について書かれています。最初から変更を想定して設計するのは難しいと思うのですが、伊藤さんも30年後、40年後にその建物をリノベーションすることを考えて、いろいろな解釈ができる状態のものをつくらうとしている。つまりそれは許容力ですよ。 「強」と「用」は意外と密接にリンクしているなと思いました。

そしていざ自分が「美」について書くときに、「美」だけすごく切り離された感じがしてとても悩みました。「強」と「用」はロジックが組めて、施主にメリット・デメリットを比較的伝えやすいのですが、「美」はあまりにも主観的すぎて、「美」だけで語るのはすごく難しいです。今回「美」を書くにあたっていろいろ本を読んでいる中で、合理的だからではなく、アンバランスでも美しいと感じる本能的な「美」もあるのだら



桜木町の集合住宅

関内の集合住宅

神田テラスビル

撮影
左、中 矢野紀行写真事務所
右 小川重雄

うなと思いました。心理学者のデニス・ダットンは、人間が美しいとか美味しいというように魅力を感じるものは、意外と人類がまだ原始だった頃から通底していると言っています。考えてみると、ロジックを組んだ状態を楽しみながら感じる美しさと、なんのロジックもないけれどなんかいいと思うのは、違うんですね。ソーシャルメディアはそこが分かりやすく、自分の作品を全然知らない不特定多数に対して出しているものなので、そこでなぜバズったのか考えると、たぶん本能的に美しいと感じたのだらうと思っています。

古澤●確かに「美」は「強」にも「用」にも内包されていて、いちばん切り離して語れない要素かもしれないですね。でも小山さんは、最初に「強」と「用」は定量的な基準であると断言して「美」は定性的と言いつつ、最終的にはSNSの反響のインプレッション数で「美」を定量化しています。

小山●そうなんです(笑)。「美」を定量基準に差し戻そうとしている。何かしら根拠がほしかったのです。

古澤●でも、「本能的な美」と「考える美」を対比的に扱っていて、「本能的な美」は、それでもやはり定量的な部分からこぼれ落ちるような、定性の領域にあるものと捉えていますよね。建築界の人と一般の人の評価も対比的に扱っていますが、一般の方に届く「美」を追い求めることの可能性って一体何なのでしょう。

小山●建築界の人は設計者の意図を比較的理解してくれていて、コンテキストの中からその建物を良い、もしくは美しいと思ってくれます。一方、一般の方は、そういうコンテキストが全く分からない状態なので、見ているのはビジュアルなんです。だからそういう意味でいくと「本能的な美」はインプレッションなんです。写真でもいいのですがぱっと見たときに、これ何だろうと思う印象で、その可能性は何かというと、僕は愛着だと思います。建物が取り壊されるときに、建築界の方々がそれに対してすごく価値を見出しているから反対をするのだけれども、一般の方々の支持は得られなくて壊されてしまうことがあります。その建物が一般の方が見て愛着が持てる「美」を備えていたら、残せる可能性が高かったのかなと思いました。

遅れて現れる「美」

松岡●以前田村の提案で、Web上にあふれる世界中の建築写真を分類し、どういったものがよりインプレッションを与え、良い作品として目に映るのか考えてみたことがあります。例えば、ぱっと見て瞬間視的に「なにかいい」と感じるもの。

その中にもきらびやかで美しいものもあれば、不思議と目を引かれてキャプションを見て答え合わせができるものもある。または周辺との関わりでできている周辺視的な「美」や、すごく巨大または広大なパノラミックな視点など、対象を捉える視点によって分類しました。今の小山さんのお話をうかがうと、それに加えて愛着とか、なんかほっとする、行ったこともないのに懐かしいと感じる意味論的な「美」もあると思うので、「美」の定義は広くて、これからの建築を捉える上で「美」は中心的な話題であるような気がしています。

古澤●キャプションで理解する「美」というのが、きっと小山さんの「考える美」と近いですね。でもそれっておそらく、定量/定性の区分を超えて事後的に遅れてやってくる「美」で、そのタイムスパンが数分とか1時間、数ヶ月という単位もあれば、数年、数百年単位で蘇ってくる「美」もあると思うんです。それがむしろ本当に根源的なプリミティブなものだとした場合に、いつの段階で理解されるのか全く予想できないわけですよね。設計者としては、種を蒔くようなつもりで設計するというのが、ひとつヒントになりそうです。

その時間差という文脈で言うと、松岡さんたちは「媒介としての用」というタイトルで書かれていますが、それも事後的に現れる「用」ですね。媒介ですが、何か変化を受け止める器として「用」を見ている。つまりある種のメディアとして「用」を見ていて、事後的にどうなるか分からないけれども、立ち現れてくる、そんな「用」があるのではないかということですね。実例として挙げている「コートハウス」も「用」のきっかけを散りばめていくような空間になっていますし、「裏庭の家」では逸脱したスケール操作というか、生活の「用」には絶対合わない大きさの階段を置くことによって、後から「用」が出てくる。それは遅れて現れる「美」と全く同じメカニズムのような気がしました。

松岡さんと田村さんは、「用」の中でも美しいもの美しくないものがあるとした場合、どういう「用」を美しいと思われませんか。

田村●「強・用・美」ってどれも何かを語ったり評価するときの基準なんですけど、何かをけなす基準にもなるような気がします。美しすぎて美しくない、使い勝手が良すぎて普通だね、というように……。でも、建築作品の評価として「面白い」ってよく言いますが、面白すぎて面白くないということはあまりないと思うんです。

小山●それすごく分かります。全てが完璧にできているとたぶん面白いとは感じなくて、何かが破綻しかけているのだけ



撮影
左、中 Takeshi YAMAGISHI

古澤邸

ど成り立っているほうが面白いと感じるのだと思います。構造ももしかしたらそうかもしれませんね。キャンチレバーに惹かれたり。「用」も、別になくてもいいものが存在したり、それによって生まれるものを面白いと感じる気がします。

田村●面白いと感じるのは割と事後的だと思うのです。これってこういうふうに使えるかなとか、こんなふうになる可能性あるね、というように。僕らは2人で設計しているからかもしれませんが、徐々にそういうものを発見していくときに面白いと思うところがあります。

古澤●面白い面白くないというのは紙一重で、そう考えると美しいと醜いも紙一重。それは侘び寂びとか、日本の古来の感性として根付いているのだと思いますし、どちらにもすぐに反転してしまう状態をどう設計するのかがやはり一番難しいところですね。

松岡●例えば、「美」から発想された無用のものも、実はいかにも「用」な建築に転換することもありますよね。巨大な階段をつくれば無駄だと思ってそこに物を置きだすし、その置き方は使用者なりに不便じゃないように「用」の発想で置かれるわけです。住人によってだんだん設えられていく。その余地をつくっているきっかけは「美」であることもある。

小山●確かにミニマリスト的な美しさのある建築もありますが、僕が求めている美しさはもう少し生々しいセンシュアルなものかもしれません。何もひだがない美しさというよりは、何かがちよっとほころびかけているような、突っ込みどころがたくさんあるものに面白さを感じる部分はあると思います。

田村●小山さんの“愛着が生まれる瞬間”というのは、どちらかというと、そういう瞬間かもしれません。

小山●そうですね。愛着は個人でみんなバラバラなので、その最大公約数的な解が出せないから建築は難しいし、すべてのものがそう言えるのだと思います。ただ結局建築って、個人邸を除いて、不特定多数の方に受け入れてもらうことを考えなくてはなりません。そのときに、ひだの深さはどれくらいだとか、その感覚や価値観はすごくずれもあるし、正解も多分ないので、設計していく上でそれを考えなくてははいけません。

古澤●ひだの多さと万人受けというのは、本来的にバッティングするのがまた難しいところですね。

田村●小山さんは立面の検討をするときに、平面も変えることはあるんですか。

小山●立面は独立させてつくっています。例えば、「桜木町の

集合住宅」も「関内の集合住宅」もそうですけれど、実際のプランからあえてファサードをずらしています。マンションなどは中のプランは変えられないので。

古澤●容積などに関係ないところで、ファサードデザインを担保しているのですね。小山さんは商業建築のキャリアが長いのでその操作の線引きみたいなものをコントロールできるので、建築写真もすごく美しいですね。

人間の可能性を拡張するような設計

田村●古澤さんのご自宅は、住まわれながら梁などの意味を発見されていくプロセスがすごく面白いと思いました。フロアによって梁と床との関係が少しずつ違いますよね。

古澤●最初は梁は完全にランダムになるようにスタディしていたのですが、フロアの中に梁が来た方がむしろランダムに見えたので、あとは構造的に決まってくる寸法を決めた上で、そこからずらすように上下に振っています。それは内部から見たときに下の空間を見やすくするのか、上の空間を見やすくするのかでフロアごとに考えています。

田村●例えば梁はこれぐらいの高さだったらテーブルになるということ想定されていたのでしょうか。

古澤●使い方を一切排除して設計したのでそれはありません。驚かれるかもしれませんが、日頃から廃墟みたいなものをつくりたいと思って設計しています。なので、使い方や強さ、あるいは美しさが判断基準からも棚上げされているような状態がくれたら、それは1つの建築の可能性なのではないかと思っています。でもそういう建築をつくれるシチュエーションってなかなかないですね。だから自分の家でまずは実践してみて、今はそれをクライアントワークでも提案するようにしています。

関本●古澤さんの建築のつくり方をメジロスタジオ時代から拝見していると、設計の決定を自分以外のものに委ねるような設計手法のように見えます。「古澤邸」も、僕だったら梁は使いやすいところに置きにってしまう気がします。古澤さんは設計の意思決定を意識的にご自身から切り離しているのか、そのつくり方に非常に興味があります。

古澤●今関本さんがおっしゃったのは、昔自分が実践していた手法で、不動産の間取り図から考える設計方法です。感覚としては概念上のリノベーションでした。僕の好きな「アルルの円形闘技場」が集合住宅に転用された銅版画があります。アルド・ロッシの『都市の建築』の挿絵になっている図版です。そこに描かれた世界は先行形態があり、その特徴が残つつ



コート・ハウス



裏庭の家

も全然違うとても豊かな状態になっていて、ある種の形態の決定が無根拠になっている状態で、無根拠の根拠性と言ってもいいかもしれません。私たちの世界は今すぐく同一化されるバイアスがありますが、その図版には同一化を逸脱してくれるような、そんな自由さがあるのです。

だから、普通の不動産間取り図の2LDKを、概念上リノベーションして、2LDKは残ってるけれど全然違った形態になるということを実験的にやっていました。これはまだ20代後半の頃で、間取り図だからクライアントにも同意してもらいやすいので一石二鳥だったのですが、うまく言語化できなかったんです。それをもう少しきちんと実験してみようというのが今のフェーズです。

無根拠の根拠性というのが、人間の可能性を発展させ拡張させてくれる原動力だと思うんです。「裏庭の家」の階段にはそれをすごく感じます。あれはリノベーションされているなと思っていて、無根拠なんですよ。

松岡●一応根拠はあるんですけどね(笑)。

古澤●無根拠という根拠性がある。あの階段は廃墟だなと思いましたね。

「用」が宿るところ

松岡●先ほどのお話の通り、建築は強固で固定的で、変更不可能なものという物質的な力学に加えて、柔軟性もあります。例えば山荘のように、ただ屋根と壁さえあって食事をして、同じ場所で雑魚寝ができればいいような弱さも含んでいます。その両方を建築と呼んでいるところが面白いんです。だから決して強固な部分だけを対象に使いやすくする必要はないと思います。「用」の柔剛をどこで折り合いをつけるか、その過程の始まりをつくるのが大事だと思っています。

さらに、「用」が宿る部分も大事で、それが例えば柱梁や床というエレメントなのか、または普通は使い方が決まっている室やコーナーなのか。いずれも物理的なものを入れることでしか設計者は応えられないと思います。「裏庭の家」では階段材料のギリギリの薄さを狙いながら大きなものをつくることを意識して、「用」の取っ掛かりになるのではないかと考えました。

古澤●「用」が宿るといふ表現は面白いですね。なんか依り代みたいなもので、神が宿るようです。

松岡●そうですね。一応階段というなじみのある名前が付いていることも大事です。

古澤●ギリギリ階段と呼べるような。階段って気づかれるの

にちょっと時間がかかるんですね。

田村●実は最初確認申請に出した時に、「階段はどこですか？」と質問されました。

古澤●それは素晴らしいですね。ちなみにその「用」が宿るときのタイムラグはどれくらいのスパンで考えていますか。

松岡●これが悩ましくて、設計時に「用」を設定しないわけにはいかないとは思っています。使い方は分からないけれど意図なくつくったものは建築ではないと思っていて、やはり建築は「用」について必ず意図や目的を伴ってはいけません。それは設計者がよく考えて提示する必要があると思うのです。ただそれは一瞬で上書きされて変更されていくことを許容していないといけないという感覚はあります。

小山●それは設計期間の中で、松岡さんと田村さんがキャッチボールのようなやり取りをしながら用途を重ねていくのでしょうか。

松岡●僕と田村の間ではあまり使い勝手の話はしません。施主とのキャッチボールですね。

田村●「裏庭の家」の大きな階段も、施主がだんだん理解していきました。この階段はなぜこんなに大きいんですか？というところから始まり、話しながらだんだん使い方を発見していくのです。そこに立ち会えるのが面白くて、そのプロセスには結構時間をかけています。

佐久間●松岡さんと田村さんの文章にはスケールという言葉が何度も登場します。小スケールの下屋とか大きな階段、家具のスケールという表現もありました。そのあたりが松岡さんたちの設計におけるキーワードなのかなと思いました。

松岡●何をコントロールしておけば着せがましくないか考えた時に、ギリギリの何かではなくて、中途半端だったり大きくつくるとは、我々の設計において大事なところかもしれません。少し小さめだから使い方を変えなくてはいけなかったり、大きすぎるから普段と違う使い方を生んだり。このスケール調整のようなことは、もしかしたら「用」の更新を促すには重要なかなと思っています。

小山●スケールを変えたときに感じる違和感が何かの取っ掛かりになっているんですね。

松岡●はい、着想はそうです。

田村●スケールのことを語りたくなるプロジェクトは、実はだいたい小さいスケッチで考えるところから始まっています。

小山●それはスタート時点から違和感はないですね(笑)。

古澤●慣習的なイメージを異質化させるというか、見ているものと、見ていると思っているものの癒着を解くような操作

ですね。それによって階段が持っているイメージが別のイメージに変化するから、大げさな表現かもしれませんが、「世界が折り開かれる」という言い方が合っているように感じます。それが小さなスケッチから生まれるというのがまた面白い。

小山●そう考えると、やはりキーワードは「違和感」なのでしょうね。僕のSNSのインプレッションの話でいうと、見た人は多分何かしら違和感があって、引っかかっているひだがあるのでしょうか。例えばすごく美しいペットボトルがあったとしても、見慣れると普通になってしまいますよね。やはりひとひねりしたのを見たときに何か波風が立ち、それが何かの発端になるのだと思います。

古澤●そう考えると小山さんの「関内の集合住宅」も相当違和感があります。物質レベルで言うと、ファサードのコンクリートはなぜこんなに薄いんだと、通り過ぎた人はみんな頭の中で考えますよね。

小山●そうですね。実際、建築界の方からは反響は大きかったです。

関本●「裏庭の家」の写真を見ると、コンセプチュアルな感じもしますし、試行的な実験要素があるので本来は「考える美」の方なのかなと思うのですが、ただ何も説明されずとも一瞬にして引き込まれるような魅力もあります。松岡さんたちはご自身の建築を「美」という観点で切ったときに、どういふものを美しいと捉えているのでしょうか。

松岡●施主に引き渡す前に2日間その建物にもって記録撮影をしています。そうすると模型では見えてこなかった発見がたくさんあったんです。視点を十数センチ動かすだけで、その建築が全く別のものに見えることってありますよね。これまでもう十分凶面を描いて、模型でも検討してきたものが、たった2日でまた新しい顔を見せてくれる。それは建築の「美」であり、建築の魅力だと思います。その感じ方や視点をどう建築の中で指定していくのかについては、今後建築を魅力的にする、つまり「美」を考える上で非常に重要なことなのかもしれません。

古澤●名前が付いているものは違和感がないもので、名付け得ないものはすごく違和感があるとも言えます。多木浩二が、「名付けられてしまった瞬間に物は死んでしまう。名前がない状態が生き生きして、建築に例えるならば建設途中と解体途中である。建設完了したらそれは死んでしまう」というようなことを言っていますが、その文脈と少し似ていると思います。だから違和感というのはまさに本能的に感じるもので、建築が生まれようとしている名前が付けられていない状態や、解体されている状態のこと。やはり「考える美」と「本能的な美」は切り分けられなくて、表裏一体なものなのかもしれません。

「強」の捉え方

関本●一方「強」は単純に考えたら構造強度のことをイメージしますが、一方で強いのに儂い、儂いものは美しいみたいなこともあるかもしれません。皆さんはご自身の建築におい

て「強」というものをどのように捉えておられますか。

小山●例えば、「神田テラスビル」という建物は、テラスの先端に当初柱があったのですが、浮遊感を出すために柱をなくしました。構造的には少し不安定に見えるけれど成り立っているところを面白いと思ってつくっています。それは非強の「強」とは違いますが、「強」がどこかで成り立っているけれどすぐに判断できない、その状態も多分違和感かもしれません。

古澤●ジェンダーの時代にこういうことを言うのはいけないのかもしれませんが、女性の強さみたいなことを言うこともありますし、建築の文脈で言えば、剛性より靱性の方が強いと見ることもできます。もっと究極に言えば、生命体そのものがやはり強いと思うんです。“エントロピー増大の法則”では、世界の全てものは崩壊に向かっていとされています。そのときに我々の体の中は、このエントロピーの増大に対して、細胞を入れ替えて自己崩壊しながら適応している、ものすごく強いシステムです。エントロピー増大に抗うのではなくて受け入れているわけです。そんな両義的な強さが建築でできたらものすごく興奮します。

だから僕はコンクリート造を好んでいます。コンクリートは現場に届くときは液体です。その液体が一瞬にして固まる両義的な振る舞いが面白くて。なおかつそれが崩壊していくときに、多分美しさをまとうと思うんですよね。

佐久間●古澤さん是对立するものを同時に並列で1つの建築の上に載せるために、とても複雑化されていますよね。今エントロピーの話をされましたが、それは対概念というものと何か繋がるのでしょうか。

古澤●価値をどこかの側面に同一化することにもものすごく抵抗があります。だから結果的に複雑というか、いろんな要素を重ねていくことになっています。でもおそらくそれは皆さんやっていることだと思うのです。あるものの価値を1つの側面に特定してしまうと、その価値にそぐわないものは意味がないという世界になってしまうので、だから相反する価値を輻輳していく。そうすることによって存在しているものが肯定される。そのようなイメージだから多分複雑になるのだと思います。

価値を1つの側面に特定してしまう世界は貧しいですよ。人間だって、自己肯定感が高いときと低いとき、すごく乱暴なときと優しいとき、情緒的なときと冷たいときなどが合わさっていてぐちゃぐちゃではないですか。だからお互い好きになるのだと思います。

関本●両義的な「古澤邸」のファサードもそれを物語っている感じがしますが、「強」というところにあえて寄せるならば、何が支えて何が支えられてるのか、力の流れ方が分からないですよ。構造家の山田憲明さんがおっしゃっていたのですが、ショーケースの中の食玩で、スパゲティナポリタンに刺さっているフォークが宙に浮かんでいるものがありますよね。本来スパゲティはフォークで吊り上げて食べますが、食玩は下から支える。これをスパゲティパラドックスと言うそうです。「古澤邸」は何かそういうものを感じるのです。果たし

てこのスラブは下から支えられてるのか上から吊られているのか、そんなことどっちでもいいじゃないかみたいなことを言っているようでもあります。

小山●逆さにしても成立しそうですもんね。

古澤●スパゲティパラドックス、初めて聞きました。面白いですね。確かにこれはひっくり返しても成立しますし、実際に僕は上下を反転させて設計したりもします。ちなみにスパゲティパラドックスというのを空間で体験したのは菊竹清訓の「東光園」です。強烈なる違和感だったのですが、いい建築だなと思った理由が分かりました。

関本●松岡さんたちの「裏庭の家」は階段を組んでいくうちにどンドンねじ曲がるのを直しながら建てていったそうですが、全部組み上がってみると力が分散し合って成立するようなところがあつたのではないのでしょうか。

田村●階段室には梁が通らないのでその部分は弱いのですが、実際物理的には階段が梁の代わりになって効いています。スパゲティの話じゃないですけど、構造に見えていないものが構造的な役割を担っています。

関本●消えていく「用」という表現をされていましたが、消えていく「強」みたいなこともあるのかもしれないね。

小山●合理的じゃない構造に魅力を感じているという部分もあると思います。例えば、サンティアゴ・カラトラバの建築は美しいと思うけれど、自分でそれを設計したいかという正直そうではありません。構造設計者が美しいと感じるものとの価値観のずれを感じることもあって、こうした方が合理的と言われても、なんか面白くないと思うことはあります。

建築家にとって「強・用・美」とは

佐久間●皆さんのお話を聞いて、「強・用・美」は解釈もいろいろあり、すごく拡張されているように思いました。「強・用・美」の有効性は今後も広がり、進化すると思われませんか。

小山●「強・用・美」は今後も建築をつくる上で、ベースロジックとなるものではないのでしょうか。そこからそれをどのように展開させるかという話が今日これだけできたので、僕は可能性を感じました。「美」については人と話すのは難しいイメージがありましたが、今日皆さんと「強」や「用」と同等のポテンシャルで話ができたのがとても新鮮でした。

古澤●果たして進化したのでしょうか。僕は進化って何だろうと思ってしまいました。

「強・用・美」はよく構造・機能・形態と言い換えられますが、もとは1つの言葉でした。松岡さんたちも書かれています。ルイス・サリヴァンの「形態は機能に従う」という言葉はすごく誤解されていて、この機能は必然性を意味している有機的メタファーです。一方で、形態はフォームのことで、形ではなく形式なんです。構造も形式ですから、形態も構造も機能もすべてフォームと言え。一緒になっているものが分解されて議論されるようになった背景は、完全なる科学主義によるものです。科学とはサイエンスで、分割して観察すること。でも僕は科学主義はもう限界に来ていると思っています。

科学主義は人間の理性の暴走であって、人間中心主義の最たるものですから。そして一番危険なのは理性ですからね。理性が問題なのは戦争を起こすということです。戦争は自国の利益の最大化という超理性体ですから。理性が暴走すると戦争が起きる。今まさに人間中心主義の、科学主義の、理性主義があるから世界がこういうことになっている。だからそれを戻さないといけません。でも懐古に戻すと懐古主義になってしまうので、そうではなくて過去の非理性を認めてくれた時代をきちんと重要視するという意味で進化だと思うのです。

つまり、「強・用・美」はサイエンス的に分解しないことによって進化すると思います。

関本●そういう意味で、始めに執筆を依頼させていただいたときに「強」だけを書くことをためらわれたんですね。松岡さんは「強・用・美」の今後についていかがでしょう。

松岡●私は「強・用・美」の全てに関わっているのは不確定性だと思っています。「用」の場合は、設計者の意図と実際使われるものには不確定な関係があります。「美」に関しても、美しいものをつくりませんが、それを決してみんなが美しいと感じるわけではなくて、それぞれ感じ方は異なるし、それを形容する言葉とともにやってきたり、時差とともに届く不確定なものであることを理解せざるを得ません。「強」に関しては、古澤さんの両義性も不確定性というか、そこに見えないものがあるというところを言われていて、伊藤さんも「強」は持続性を含めて計算では定義できないものになっていると言っている。

我々設計士としては、「強・用・美」の不確定な状況を受け入れて、そのまま設計していくのだと思います。自分たちがやりたいことも不確定性を含んでいて、状況と意図がともに進化していくべきなのではないのでしょうか。そういう意味での進化なのかなと思っています。

田村●僕は「美」は立面図で、「用」は平面図、「強」は断面図としての捉え方だと思いました。

古澤●なるほど、面白いですね。見かけ上は分かれているけれど、意味するのはひとつの建物だと。

田村●建築に向かう語り口の違いだと思います。不確定要素という話がありましたが、一方で建築はあらかじめ計画をしないではいけません。どれくらい射程の広い状態を保って設計することができるのかなのだと思います。

建築の強さや美しさ、またはこれ使えるなって思う瞬間は、アイデアをいろいろつくってカタチにして、オプションをいくつも比較するなかで、形は変わっても案の骨格は変わらない瞬間だと思うんです。形が動いても案が動かなくなる瞬間。その瞬間が建築がそこになじみ、強度を持ち始める時なのだと思います。

関本●本日は「強・用・美」という難しいテーマを解きほぐしながらお話いただきました。非常に面白く有意義な時間でした。どうもありがとうございました。

(2024年1月12日 JIA 館1階建築家クラブにて収録)